

Action for Butterflies

チョウの舞う豊かな自然を将来へ

ウスイロヒョウモンモドキの保全活動がより進展しています

ウスイロヒョウモンモドキ（以下、ウスイロ）は、国内でもっとも減少したチョウのひとつになってしまいました。かつては中国山地に広く生息していましたが、1980年代以降に急速に減少し、2000年頃には、兵庫、岡山、鳥取、島根の6地域で見られるのみとなりました。

こうした状況を受けて2000年頃から、当時生息していたすべての場所で保全活動が開始され、これまで10年以上にわたって活動が行われてきたことは、本誌「保全活動レポート」でも随時紹介してきたとおりです(12, 14, 15, 16, 17号)。

長期的な保全活動によって、それぞれに一定の成果が得られた一方で、減少傾向はなかなか止まらず、さらにシカ害による草原の荒廃など、新たな減少要因が生じてきたこともあり、課題は増え続けました。そうした中で、今年2月の種の保存法指定をきっかけとして、保全の方向性を再構築するなど、新たな動きも生まれています。

今回はこれまでの経緯とともに、ウスイロを取り巻く最近の動きをご紹介します。

1 絶滅をくい止めた保全活動

ウスイロは、食草オミナエシやカノコソウが生えるススキ草原に生息しますが、その生息地は、規模の大きな草原が主体でした。しかし、管理の放棄に伴う草刈りの頻度の低下によって、多くの草原では植生がウスイロには不適になり、保全活動が始まった2000年頃には生息地の面積も縮小したことに加えて、わずかに残っていた生息地では過度の採集も行われていました。そのため、各地での取り組みでは、草刈りの面積をどのように維持・拡大していくか、そして採集圧をどう防ぐか、という2点が、当初の大きな課題となっていました。

取り組みは多くの地域で速やかに行われ、生息環境の維持・改善のために、草刈りだけではなく、食草の植栽も合わせて行われたところもありました。こうした取り組みは、近在のチョウの愛好者が地域に働きかけることで始まった例がほとんどでしたが、地域と協働で進めていくなかで、



ウスイロが地域の取り組み課題として住民に広く認知されるようになり、活動が定常化する形ができあがってきました。

ほとんどの場所では活動の成果も上がり、ウスイロの個体数の現状維持または回復傾向が見られました。なかでも、兵庫県ハチ高原では個体数が顕著に増加しました。ここでは、取り組みを始めた2003年にはわずかな成虫しか確認できない状況でしたが、2006年のマーキング調査では875個体に標識され、数千個体が発生したと推定されました(本誌6号)。このように、適切な草刈りによって、ススキ草原の多様性が復元されることで、ウスイロの個体数は大幅に増加することが改めて認識されたことは、取り組む人々にとっても大きな希望となっていました。

また、こうした動きと並行して、ウスイロ保全の会合や調査、研究、印刷物の発行が行われてきました。まず、1997年11月に行われた日本鱗翅学会第44回広島大会のシンポジウムで、「ウスイロヒョウモンモドキの現状-問題点と課題」と題した講演が行われ、当時減少傾向にあることが認識され始めていたウスイロについて、問題が提起されました。2000年12月には、「ウスイロヒョウモンモドキの衰亡と保護(ホシザキグリーン財団主催)」と題したシンポジウムが開催され、ウスイロに関わるほぼすべての人が一同に集まり、踏み込んだ話し合いがなされました。また、生物多様性保全の取り組みの拡大や都道府県での希少種条例の制定などの流れに沿う形で、岡山県のウスイロヒョウモンモドキの全域調査(岡山昆虫談話会、1999年)、環境省によるウスイロヒョウモンモドキの生息実態の調査(2000年)、鳥取県によ

1 兵庫県ハチ高原での活動状況

兵庫ウスイロヒョウモンモドキを守る会が、地域住民や市町村、兵庫県と協働しながら活動を進めている。行事には多くの参加者があり、活動の輪が広がっている。



シカの侵入防止柵。柵の設置範囲を少しずつ拡大させている



オミナエシ植栽会（2016年9月17日）。現地の種子を使って苗を育て、今年は2000株ほどを植栽した



観察会（2016年7月10日）。65名ほどが参加した

る県内でのウスイロの生息状況調査（2003～2005年）、島根県による三瓶山のウスイロヒョウモンモドキに関する検討会議の開催（2002年）等も進みました。こうした動きが、ウスイロの自然公園法での指定動物の指定、鳥取県の条例指定、岡山県上斎原村（現鏡野町）での天然記念物指定につながったほか、ほぼすべての場所で、環境省および各都道府県、市町村のいずれかによる事業の実施あるいは活動への支援が行われてきました。

当時、ウスイロと並んで強く絶滅が危惧されたチョウとしては、ゴイシツバメシジミやヒョウモンモドキがありました

が、これらは生息地が局限されるものでした。それと比較してウスイロは、当時はまだ4つの県に生息していましたが、すべての生息地で保全の取り組みが開始されたことは前例がなく、チョウの保全の流れを広げる動きでした。ウスイロの観察会やオミナエシの植栽会などの普及啓発活動が継続的に行われた結果、ウスイロが新聞などのメディアで取り上げられる機会も増え、保全活動は広く知られるようになりました。

また、調査研究も様々な角度から行われ、島根大学や近畿中国四国農業研究センターによるウスイロの生態や草原

管理、各保全団体を中心としたウスイロの生息状況のモニタリングや生態に関する集中的な調査などを通して、生態の解明がすすんだ結果、草原の管理方法やオミナエシの増殖の方法、飼育下繁殖など、保全の技術についても開発が進んでいます。

2 近年の生息状況と課題

こうした取り組みの結果、当初は回復傾向が見られましたが、2010年頃からは、ほぼすべての場所でウスイロが目立って減少するようになり、絶滅が強く危惧される状況となりました。大きな要因としては、下記の4点が考えられました。

①シカによる植生への影響

2000年代初期には、ウスイロの生息地でシカの食害が問題になる場面はありませんでした。しかし2010年以降、シカの分布拡大あるいは個体数の増加によって、食草や吸蜜植物が食べられて草原から姿を消し、ウスイロが生息できなくなる場所が見られるようになりました。影響は、まず兵庫県および鳥取県の生息地で顕在化し、現在では岡山県の鏡野町恩原高原や新庄村でも影響が出始めており、今後さらに悪化することが懸念されます。鳥取県および兵庫県の生息地では、植生を守るためにシカの侵入防止柵を作っているものの、草刈りに加えてシカ防止柵の設置という新たな対策が必要となることで、資金・労力面の負担はますます増大しています。シカ柵は大面積での設置が困難であることから、ウスイロの保全エリアとして確保できる面積がますます小規模になっていくことも、大きなマイナス要因です。

②草原維持・拡大のための草刈りが十分にできなかったこと

ウスイロの保全のためには、広い草原環境を維持することが必要です。しかし現在では草の利用はほぼなくなり、草刈りはウスイロの保全だけを目的として行われるようになってきました。広い面積での草刈りが望ましいことはわかっているものの、人員・資金を十分に確保することが難しく、実際に刈る範囲は、どうしても狭くなってしまいます。これまでの前例から、ウスイロの安定した生息には少なくとも3ヘクタール程度の草原が必要で、ススキの丈が高くなった場所では年2回刈ること、そして刈った草を除去することが重要であることは判明しているのですが、実現は労力面から困難でした。このため、草原の面積および質の悪化がますます進みました。

③天候の不順などの要因も顕在化してきたこと

近年、チョウの個体数が全体的に極端に減少する年が見られます。国内での原因はよく解明されていませんが、天候不順や気候の変化の影響が表れている可能性があります。

ウスイロでも、一見したところ環境が良好と思われる生息地でも、個体数の減少が目立つ局面がありました。重要な吸蜜植物であるオカトラノオの開花が極端に少ない年があるなど、複合的な要因が複雑に作用している可能性もあり、原因の究明は容易ではありません。

④小個体群となってしまったこと

かつては面積の広い草原に生息し、隣接する生息地も十分に存在していたことから、仮に1ヶ所で減少することがあってもすぐに回復し、全体としては安定して生息していました。なかでも、岡山県の新見市草間台地のように、農地の周辺の小規模な草地に点々と生息していた場合には、生息地同士がネットワークで結ばれ、交流があったことが、大きな意味を持っていたと考えられます。土地利用による分断によって、小規模な生息地が孤立してゆくことで、生息状況は不安定になり、生息地の減少が加速的に進んでいった可能性が高いです。

このように、かつてのような十分な広さの草原環境を復元することが難しいという大きなマイナス要因のうえに、シカの増加や天候不順など新たに生じた要因が重なり、各地でのウスイロの状況は、危機的な方に加速的に進んでしまったと考えられます。

さらに、そこに過疎などの社会的な問題も加わってきます。かつては生活のために必需であった草の需要はなくなり、各地の草原が消失するなかで、減少の途上で最後まで残った小規模な生息地を現状のまま維持しようとしても困難です。草原の面積を拡大しない限り、ウスイロの個体群の存続は難しいのですが、各地での保全活動が10年以上継続するなかで、どこでも中心メンバーはほぼ変わりがなく、高齢化という問題にも直面しています。

3 最近の動き

このように危機的な状況を迎えているなかで、ウスイロは、今年2月に「国内希少野生動植物種」(種の保存法の指定種)に指定されました(本誌22号参照)。それを契機に、生息状況を回復させるための新たな取り組みも始まっています。

本年5月には、環境省中国四国地方環境事務所主催で、ウスイロの保全に関する情報共有のための会議が開かれました。各生息地の保全団体関係者と行政関係者(市町村、都道府県)が一同に集まり、生息・保全状況や保全技術の情報共有がなされ、今後の方向性についても議論されました。これまでもウスイロ関係者が集まる場はあったものの、ここまで大勢が集まったことは初めてで、課題の共有や今後の方向性に関する意見交換の場として非常に有意義でした。

2 鳥取県佐治町での活動状況

余戸地区ウスイロヒョウモンモドキ保護の会が、鳥取県や環境省、他の団体と協働しながら、活動を進めている。



2016年10月16日に行われた草刈り作業。会のメンバーのほか、鳥取大学や鳥取自然保護の会から参加した30名以上の手で、広い範囲の草刈りと刈草の撤去を十分に行うことができた



同日にはシカ柵の設置作業も行った



作業終了後の懇親会

この会議を受けて、各地での保全活動も従来よりも拡大して進められています。環境省や都道府県、市町村等からの生息地の具体的な保全に関する支援がこれまで以上に広がりました。しかし、ウスイロを安定した個体数に回復させるほど十分なものではありません。ウスイロの保全は長期にわたって継続していくことが必要であり、人的・資金的な面から体制を構築していくことが必要です。

4 今後に向けて

当協会ではこれまで、各地の保全団体の活動支援を行ってきましたが、ウスイロは依然として各地で危機的であるこ

とから、今年度からは、各地での活動の調整や助言、現地調査、生息地管理の支援など、引き続きウスイロの保全に重点を置きながら、取り組みを進めています。

ウスイロは、草原性のチョウのなかでも、国内での絶滅がもっとも危惧される種になってしまいました。複数の個体群をどのように保全していくのか、草原環境の広さをどのような体制で維持していくのか、重要な課題が横たわっています。今後も重点的な取り組みを継続すると同時に、今後は会員の皆様にも人的・資金的なご協力をお願いしていきます。ご協力と支援を、よろしくお願いたします。
(中村康弘)